

## 日本語の会話に見られる男女差

松村, 瑞子  
九州大学比較社会文化研究院日本社会文化専攻・日本語教育講座

<https://doi.org/10.15017/8636>

---

出版情報：比較社会文化. 7, pp.69-75, 2001-03-01. 九州大学大学院比較社会文化学府  
バージョン：  
権利関係：

# 日本語の会話に見られる男女差

## Gender Differences in Japanese Conversations

松村 瑞子\*

キーワード：ジェンダー、自称詞・対称詞、終助詞、スタイル交替

### 1. 序

言語における性差の研究の中で注目された研究に、アメリカの言語学者 R.レイコフの“Language and Women’s Place”(1975)がある。この著書でレイコフは、女性が社会的に低い地位におかれていることは言語表現に顕著に表れているとした。レイコフによると、女性が女言葉(例えば lovely, divine のような女性独特の形容詞、過度に用いられる付加疑問文や上昇イントネーション、丁寧表現・強い断定のない表現等)を使用しなければならないのは社会的に低い立場におかれているからであり、女に関することば(例えば lady, professional, Mrs./Miss 等)のもつ性差別的な含みは、社会的処遇における女性蔑視を反映するものであるとした。

日本でも、4年後、日本語は日本社会における女性の低い地位を反映しているとした著書『日本語と女』(1979)が寿岳章子によって出版された。寿岳は、尻上がりイントネーション・鼻声の頻度、女性週刊誌のグラビアにおける文の長さ・種類、品詞の頻度、漢語や外国語の比率等、文学作品や歌の歌詞における女性語等から、日本語は女性に女らしさを求める言語であるとする。

これらの著作は社会に強いインパクトを与えてきたし、また女性の視点から言語を見なおすきっかけになったことも確かである。しかし、これらの著作には違和感を感じる部分も多い。それは、勿論この20年間におこった男女差についての意識の変化にもよるだろうし、言語現象と男女の社会的地位があまりに直接的に結びつけられているからでもあろうし、また記述されている言語現象に対して与えられる価値は個々の文化によって異なるのであり、女性語＝丁寧・間接表現＝社会的に低い地位、とすることには抵抗を感じるためでもあろう。

阿部(1997)はマダガスカルの人々の話し方の特徴を例に

挙げ、収集したデータを調査者自身の文化の価値観を通して判断するのではなく、調査された社会・文化を総合的にとらえた上で体系的に分析を行なう必要があるとした。即ち、マダガスカルでは、男性の方が女性より婉曲で間接的な話し方をするが、男性の方がより高い地位におかれている。これは、この社会の価値観では、アメリカ社会の価値観とは違って、婉曲で間接的な話し方をする方が権威をもち、教養があると見做され、より尊敬されるためである。この例からも分かるように、各々の社会のしぐみを総合的にとらえた上で、言語現象は解釈されるべきだとしたのである。

井出祥子は、日本語における言語使用と相手への待遇意識の丁寧度についての実態調査および分析結果(井出他(1984)、井出他(1985))より、日本において女性が男性より丁寧な言語表現をするのは、地位の差によるものではなく役割の差によるものであるとした。この結果を踏まえ、井出(1994)は、日本語には欧米での女性語イコール劣性の言語という構図はあてはまらないとした。

これらの研究から推察されるのは、日本における言語形式の男女差を、フェミニズムの視点からのみ考察することは不可能であり、日本独自の社会・文化のしぐみを考慮した上で分析を行なう必要があるという点である。(フェミニズム本家のアメリカにおいてすら男女の差を異文化間コミュニケーションとしたタネンの著作 You Just Don’t Understand(1990)が出版され、フェミニズムとは違った観点から男女差を考察していこうとする研究も数多く行なわれている。)

そこで、この論文では、先ず、井出他(1985)・井出(1994)の分析結果・考察を基盤として、「何故日本において女性は男性より多くの敬語表現を使うのか」について考察していく。次に、タネン(1990)の示したアメリカでの会話における男女差について概説し、日本での会話における男女差

\* 日本社会文化専攻・日本語教育講座

との共通点、相違点について論じていく。最後に、テレビの談話番組「徹子の部屋」における黒柳徹子と男女それぞれ5人の対話者との会話を分析することで、日本語の会話における男女差について論じていく。

## 2. 井出他(1985)で調査された統計上の男女差

井出他(1985)は、女性の方が男性より丁寧な敬語を使用しているという先行研究(F.C.パン編『日本語の男女差』等)の結果を踏まえ、何故女性は男性より丁寧な言語表現を用いるのかを解明しようと2種類の調査・分析を行なった。1つは面接アンケート調査とその分析、もう1つは実際の発話の録音とその文字化資料の分析である。

面接アンケートでは、男女各々250人余りの被験者に対して、「いつ行くか」を人に尋ねる時どのような表現を用いているか、またそれぞれの表現はどの程度の丁寧度をもつと思うか、日常どんな人と接しているか、その人たちに対しての上下・親疎の意識、「いつ行くか」をそれらの人に尋ねる時どのような表現を用いるか等のアンケートを行い、男女別の調査結果を比較対照させた。その結果、ほとんど全ての言語形式に対して女性よりも男性の方がより高い丁寧度の値を与えられていること、即ち同じ表現であっても女性より男性の方がより丁寧だと思って使っていること、実際の会話において考えていたより丁寧な形式を使っている相手は男女共に配偶者、配達人、友人等私的活動範囲内で付き合い人々であり、反対に考えていたより丁寧でない言語形式を使っている相手は部下、同僚、上司等公的な活動範囲での仕事上の関係の人々であり、働く男性と働く女性と主婦を比べると、働く男性と働く女性の言語使用パターンにより多くの類似がみられたこと、即ち言語形式の男女差は性差よりむしろ社会での役割の差から生じていることが分かった。

実際の発話の文字化資料では、大学生の娘を持つ49歳の主婦の1週間の会話が録音・文字化された。それぞれの会話が個人的関係のない相手との会話、自宅で長女の大学の指導教授との会話、朝自宅で家族との会話等、のように分類され、会話の場面ごとにデス、マス、ゴザイマス、丁寧度の異なる動詞・形容詞、様々の呼称、相づち等の出現回数が調査された。その結果、この女性は非常に高い丁寧度から非常に低い丁寧度の言語形式まで多様なレパートリーをもっていること、場面や相手が異なると使われ方のパターンも異なるが、同じ場面、同じ相手に対しても異なった丁寧度の言語形式が用いられており、固定した使われ方のパターンとして捉えられないということが分かった。(相づちの形式については、ハアはあらたまった場面であらたまった相手に使われる、ウンは気楽な相手に対して使われ

る、エエとハイはあらたまった相手・場面にも気楽な相手・場面にも使われるがエエは娘に対しては用いられない、また娘には相づちの頻度は低い等の結果がでた。)

これらの結果を踏まえ、井出(1994:6)は、女性が高度な丁寧度の言語表現を多用して話すのは、相手を高め自分を相対的に低めるためだけでなく、自分自身の地位と品位を示すためのものであり、これからすると女性の丁寧な言葉遣いは地位が低いからというネガティブな捉え方のみならず、自分の品位の高さを示すためというポジティブな捉え方をすることもできると述べた。

井出他(1985)は、女性が男性より丁寧な言語表現を用いるのは、必ずしもそうすることを強いられているためではなく、自ら選択してそうしているという解釈もできることを統計結果を用いて明示したという点で意義を持つ。では女性は実際の会話において、一体どのような選択を行なっているのだろうか、男女にはどのような選択の差があるのだろうか、また何故この差は起こるのだろうか。

## 3. タネン(1990)の示した男女の会話のスタイルの違い

言語行動の性差を社会における男女の地位の差とは直接結びつけず、男女が異なる言語行動をとるのは男性と女性が異なる文化に属しているからであるとした著書に、タネン(1990)の*You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*がある。タネンは、男性と女性の言語行動の違いは、どちらかが社会的に支配的な立場にあるからとか従属的な立場にあるからとかいうものではなく、子供の頃からの仲間同士の付き合いを通して習得されていった会話のスタイルの違いから起こるものであり、男女共にその違いを理解すれば男女間の誤解やそれに伴う悲劇は回避することができるとした。

タネン(1990)によると、女性の社会は人と人との繋がり(connection)を大切にする社会であり、親しさ(intimacy)という概念が鍵となっている。この社会では、個々人が複雑な交友関係網を作り上げ、差異は最小に止め、合意に達しようと努め、違いを強調するような優越性は出来るだけ外に出さないようにする。一方、男性社会は地位(status)を重んじる社会であり、独立(independence)という概念が鍵となっている。人との結びつきを重んじる女性社会で重要なのは対称性、即ち人は皆同じであり、お互い同じように親しみを感じているという見方である。一方、地位を重んじる男性社会で重要なのは非対称性、人はそれぞれ異なっており、階級組織の中の異なった地位に位置しているという見方である。

この相違は、男女の会話のスタイルの相違に繋がる。女性にとって、会話とは仲間との親しい関係を作り、それを

維持するための手段(rapport talk)であるため、類似性を強調することで対立はできるだけ避けたり、悩みを打ち明けられた時は同じように悩みを打ち明けて悩みを共有したり、また家族や友人との私的な場面での会話ではよく喋って(private speaking)仲間との親交を深めようとする。一方、男性にとっての会話は、自身の独立を保ちながら、社会階層の中に自分の地位を確立し、それを維持していくための手段であるため、出来るだけ大きなグループの公的な場面で自分の意見を主張する(public speaking)ことを好み、自分の知識や技術を誇示したり、言葉巧みに話をしたり、冗談を言ったり、情報を提示したりして注目的となろうとする。家庭内においても、公的な場面におけるような報告調の話方(report talk)になりがちであり、それは私的な会話には不適切であるため、必然的にあまり会話をしないことになる。

タネンによって示されたアメリカにおける言語行動の男女差は、ある程度日本における男女差にも当てはまるが、かなり異なっている部分もあるように思える。タネンの記述する女性独特の特徴の中には、例えば類似性を強調して対立を避けようとする等、日本では男女共に当て嵌まるものも多い。さらに、日本においては社会的地位を重んじる傾向は強いのだが、だからといって必ずしもタネンが記述するような男性の特徴、例えば公の場面で自分の意見を主張して地位を確立しようとする、には繋がっていない。

中根千枝(1967)(1978)は、『タテ社会の人間関係』『タテ社会の力学』において、社会集団の構成の要因には2つの異なる原理、資格(男女、老若、素性、学歴や地位、職業など)と場(地域・所属機関等の資格の相違を問わない一定の枠による集団)が設定できるとした。ある社会集団は資格と場のいずれにも属しているが、社会によって資格と場のどちらかの機能を優先させる場合があり、日本の社会では場が優先されるとした。(近年日本の社会においても、資格による集団の重要性が指摘されてきているが、ここでは触れない。)日本では、場の共通性によって構成された集団が枠によって閉ざされた世界を形成し、個々の構成員をしっかりと結びつけていく。この構成員の一体感形成に重要なのが、タテの組織、即ち序列意識であるとした。

日本がこのような社会構造をしていると考えると、日本における言語行動の男女差は、タネンの言うように、「女性にとっての会話は仲間との親しい関係を作るための手段であるのに対し、男性にとっての会話は、自身の独立を保ちながら社会階層の中に自分の地位を確立していくための手段である」というような二分化はできないだろうということは容易に想像がつく。井出他(1986)・Ide(1989)は、アンケート調査の結果を基盤として日本とアメリカの依頼表現を比較することで、日本では年齢・地位・性別等相手

に応じて言語表現を使い分けているのに対し、アメリカでは相手に応じた表現の使い分けはほとんどみられなかったという結論を出した。また Matsumoto(1988)は、欧米における丁寧さと日本における丁寧さの相違を論じながら、個人とその権利を基盤とした欧米の文化とは異なり、日本の文化においては個人の欲求よりもむしろ「グループの中での他の人々との相対的位置」、「分をわきまえ他の構成員に受け入れられること」が重要なのである。それゆえ、日本語における丁寧さでは、自分はどのような場にいるか、他の会話参加者との社会的関係等々を話者が正しく認識し、それらを認識していることを示すことが不可欠であるとした。さらに松村・因(2000)では、日本語の会話においては、男女を問わず「わきまえ」を示すことが重要であることを、自然な会話の談話分析を行なうことで示した。

日本においては、男女共に相手との相対的位置を認識しながら分をわきまえることが求められており、また対立はできるだけ避けて互いに相手に受け入れられようとしているとしたら、日本語の会話においては一体どのような男女差が見られるのだろうか。

#### 4. 日本語の会話に見られる男女差

日本語には女性専用とされる文末形式「わ」「かしら」や自称詞「あたし」、男性専用とされる文末形式「ぜ」や「ぞ」、自称詞「ぼく」「おれ」があるとされており、また敬語や丁寧語は女性の方が男性より多く用いられると言われている。しかし、実証的研究によると「わ」「だわ」のような女性専用の文末形式は衰退していつの間にか殆ど使用されていない(尾崎(1997))、女性専用の疑問表現「わよね↑」「わね↑」や男性専用の疑問表現「だな↑」「だよな↑」が衰退したこと、女性が主として使うとされた疑問表現「名詞+ね↑」「なの↑」「のね↑」等や男性が主として使うとされた疑問表現「かね↑」「かな↑」「だよね↑」等が男女共通に使う中立的疑問表現に移行しつつあること(中島(1997))等、男女差は縮まりつつあるという結果が出されている。

一体どの程度まで男女差は縮まっているのだろうか、また今も残っている男女差にはどのようなものがあるのだろうか。また、それは何故だろうか。

##### 4.1 データ

ここで用いるデータは、テレビのインタビュー番組「徹子の部屋」における主人役の黒柳徹子と彼女の部屋に客として招かれたそれぞれ5名の男女との会話の約10分間のトランスクリプトである。この番組を選んだ理由は、登場する客の性別、年齢、社会的地位が多様多様であるため、様々

の社会的関係をもつ対話者間の自然な会話を数多く収録することができるためである。表1は、ここで用いた会話におけるゲストの職業、黒柳徹子とゲストの年齢、社会的地位における上下関係、親密さの度合いを表にまとめたものである。男女を対照できるように、番号続きの男女（例えば1と2）は、年代や社会的地位等がほぼ等しいゲストとした。

表1 対話者間の関係

職業	性別	年代	社会的地位	親密さ
1 歌手	男	かなり下	下・超人気	弱・2度目
2 女優	女	かなり下	下・一時超人気	やや弱・昔共演有
3 タレント	男	かなり下	下	やや弱・昔共演有
4 タレント・女優	女	かなり下	下	弱・初対面
5 俳優	男	下	下・高人気	やや弱・面識有
6 女優	女	下	下・高人気	弱・初対面・主人と面識有
7 俳優	男	ほぼ同	ほぼ同	やや強
8 声優	女	ほぼ同	ほぼ同	強
9 俳優	男	上	上	強
10元華族	女	上	かなり上	弱・初対面

#### 4.2 分析

日本語にある男女差が中性化している中で、現在も男女による使い分けが顕著なのは自称詞「わたし」「あたし」「ぼく」「おれ」・対称詞「あなた」「きみ」「おまえ」を含めた人を指す表現である。また、2節でも述べたが、女性は男性より多くの敬語を使用するという事は統計的に確かめられている。さらに、松村・因(1998)(2000)で考察したスタイル交替の機能や頻度においても、男女差が認められる。そこで、ここでは其々の会話の話者がどのような自称詞・対称詞をどの位の回数用いているか、尊敬語・謙讓語・丁寧体をどの位の頻度で用いているかについて調査する。さらに、スタイル交替については、常体・俗語・終助詞の頻度、冗談や内輪話を言っているかどうか等、各々の話者が会話の進行に応じてどの程度スタイルを使い分けているかの男女差を調べる。

##### 4.2.1 自称詞・対称詞の頻度

表2は、ここでデータとした会話の中で用いられた自称詞と対称詞の種類とその頻度を表にまとめたものである。大まかに言って1000発話程度のトランスクリプトにおける自称詞・対称詞の出現数を数えたものであるが、頻度が非常に低いことが分かる。このことは、先行研究(小林(1997))の結果とも一致している。「わたくし」「あたくし」は年配の司会者やゲストに限られており、しかも頻度はかなり低い。「わたし」「あたし」については、男性については年配のゲストに限られている一方、女性についてはほぼ全員の女性がこの形式を用いており、頻度は低いがかなり定着した形式になっているといえる。男性専用と言われる「ぼく」「おれ」については、20代の若いゲストか、かなりくだけ

た話をする際に年配のゲストに使用されているだけであり、女性の「わたし」と比べて使用は限定されている。2人稱については、できる限り明示しないのが普通であり、インタビューを行なう司会者のみがゲストの仕事や日常生活について質問する際に「あなた」を用いているが殆どは目下のゲストに対してであり、目上のゲストに対しては決して用いていない。司会者であってもゲストであっても、どうしても相手を指示する必要がある場合は名字さんか名前様を使っている。

表2

	わたくし	あたくし	わたし	あたし	ぼく	おれ	自分	あなた	*さん
1 司会者 ゲスト男			1	1				9	1
2 司会者 ゲスト女		1		2				10	1
3 司会者 ゲスト男	4		5				1	6	3
4 司会者 ゲスト女			1					3	1
5 司会者 ゲスト男	3	2	2	1		3		5	1
6 司会者 ゲスト女			3	1				1	
7 司会者 ゲスト男	2							1	
8 司会者 ゲスト女			5					1	1
9 司会者 ゲスト男			2			9		2(あなた2)	3 2(名前さん1 ・名字さん1)
10 司会者 ゲスト女	1								2(名前様2)
計 司会者	10	3	17	5	0	0	0	36	8
ゲスト男	0	0	11	0	24	3	1	2	6
女	2	0	25	13	0	0	0	0	1

##### 4.2.2 尊敬語・謙讓語・丁寧体の頻度

表3がこのデータで用いられた尊敬語・謙讓語・丁寧体の頻度をまとめたものである。

尊敬語・謙讓語と丁寧体の頻度の差は歴然としている。主語を聞き手にすれば聞き手に対する尊敬を表現するのに使える尊敬語はともかく、謙讓語については「いただく」等の固定した表現を除けば殆ど衰退していると言える。また尊敬語・謙讓語について言えば、男女差は殆どみられず、司会者の使用頻度も男女差よりはゲストの社会的地位や年齢に応じているようである。それ故、社会的地位が遥かに高く年齢も上である女性ゲスト10に対しては、最も頻繁に尊敬語を用いてわきまをを示している。また年齢や俳優としてのキャリアが上である男性ゲスト9に対しても、ゲストが冗談を交えながらくれた話し方をしていても、司会者は尊敬語を頻繁に用いている。さらに、年下のゲストであっても、現在高い人気をもつ男性歌手1や女優6については頻繁に尊敬語を使っている点も興味をひく。

丁寧体について言えば、司会者は女性ゲストより男性ゲ

表 3

	尊敬語	謙讓語	丁寧体
1 司会者	13	3	50
ゲスト男	0	0	80
2 司会者	7	0	45
ゲスト女	4	1	49
3 司会者	5	4	50
ゲスト男	4	0	61
4 司会者	0	0	8
ゲスト女	0	0	23
5 司会者	9	4	76
ゲスト男	3	1	100
6 司会者	18	3	28
ゲスト女	4	1	64
7 司会者	22	0	44
ゲスト男	7	7	97
8 司会者	11	0	76
ゲスト女	1	0	97
9 司会者	16	0	32
ゲスト男	4	0	54
10 司会者	38	4	33
ゲスト女	6	5	48
計司会者 (対男ゲ)	65	11	252
司会者 (対女ゲ)	74	7	190
男ゲスト	18	8	392
女ゲスト	15	7	281

ストに対してより頻繁にデス・マス体を用いており、ゲストの方も男性ゲストの方が女性ゲストよりデス・マス体を用いていることが分かる。逆に言えば、女性同士の方がリラックスしやすく、デス・マス体から普通体への移行が早いとも言える。

表 4

	普通体	俗語・強意語	終助詞	冗談等
1 司会者	6	12	36	1
ゲスト男	8	15	54	6
2 司会者	2	3	25	0
ゲスト女	8	8	26	0
3 司会者	12	5	28	5
ゲスト男	3	8	25	14
4 司会者	16	4	17	1
ゲスト女	7	16	17	4
5 司会者	20	6	47	0
ゲスト男	2	6	58	0
6 司会者	20	12	27	0
ゲスト女	1	6	40	2
7 司会者	2	1	20	0
ゲスト男	0	0	41	0
8 司会者	14	10	37	0
ゲスト女	7	27	62	2
9 司会者	5	5	16	0
ゲスト男	33	10	48	14
10 司会者	5	4	8	0
ゲスト女	5	0	32	0
計司会者	102	62	261	7
ゲスト男	46	39	226	34
ゲスト女	28	57	177	8

## 4.2.3 スタイルの交替

松村・因(2000)で述べたように、身内ではない日本人成人同士の会話は標準的には敬体で行なわれるが、相手の緊張を解してあげようとか、親しみの気持ちを表現しよう等の目的のために、その標準から少し逸脱した形式を用いることがある。ここでは、その逸脱した形式として、普通体の頻度、「～しちゃった」「～しなきゃ」「おかあさん」のような俗語の使用、「超」「すごい」等の強意表現、終助詞「よ」「ね」「の」の使用、話を面白くするための冗談や誇張、故意に逸脱した敬語(行動)の使用について、男女差があるかを調査してみる。表4は、ここでのデータにおける上記の逸脱形式の頻度である。

普通体については、以下の下線部に示されるように、目下のゲストの緊張を解して気楽に話をしてもらおうという心遣いから、司会者が使っていることが多い。それに対して、女性ゲストは司会者のスタイルに同調し、敬体を回避したり、俗語や強調語を用いることが多い。女性ゲスト4Fは文字囲みした部分にあるように、「ですって」「こもっちゃって」「みたいで」「お母さん」「ぼろぼろぼろぼろ」のような俗語、内輪言葉、強調語を用いながらも、文末には「泣いてたんですって」と丁寧体を用いる等、目上の人々のスタイルに合わせながら、尚且つつきまちは示していることが分かる。一方、男性ゲストは司会者のスタイルに合わせるよりむしろ、(2)の文字囲みした部分に見られるように、自分の自慢話をしたり、「ぼく出世しちゃったんですよ」のような冗談を自分から言い出したり、面白可笑しい話をしたりして自分の話に相手を引き付けようとしていることが分かる。(2)では、最後に目上の司会者が同調して「面接官なわけね、あなたは」と逆に同調して冗談を加えている。また、このような冗談等の無い場合は、(3)に見られるように、目上のスタイルに同調しない簡単な相づち「はは、そうらしいですよね」で終わるため「そっけない」印象を与える。

## (1) 会話4 司会者(K) 女優・タレント(4F)

K: あら、いやだ。どうして近所の人が先に知ってたんでしょね。「あーら、お宅また女の子だったんですって」って。

4F: 「ですって」って、聞いてしまった、それで、一回も病院に見舞いに来なかったんです。

K: あーら。

4F: 父がショックで、それで、もうご飯も食べずに部屋とか閉じこもっちゃって、なんか、本当に女の子だったのがショックだったみたいで、それで、お母さんもそれを聞いて、ずっとあたしを横においたまま、ずーとぼろぼろぼろぼろ泣いてたんですって、

- (2) 会話1 司会者(K) ロックバンドリーダー(1M)
- K: それで {ふふ} そういう毛して警備員してたんですか, じゃあ.
- 1M: いや, そうなんです. しかも, あの, 警備員をこうやってたんですけど, グレイのメンバーって全員 すっごい真面目なんです. もう, バンドもちゃんとやるし, あの一, アルバイトもちゃんとやってい う, 人たちばかりで
- K: ええ.
- 1M: あの一, 警備員をやってるうちに, ぼく出世しちゃったんですよ
- K: ええ.
- 1M: で, あの一, 最後の1年間くらいはね, 面接とかやってたんですよ {ふふ}.
- K: あ, ほんと一.
- 1M: もう,
- K: 面接官なわけね, あなたは.
- (3) 会話3 司会者(K) タレント(3M)
- K: そんな, 動かない.
- 3M: 陽なたぼっこばかりしてます
- K: でも, 私が, 私インドの人がねえ, 口の中でシュワシュワ, クウとか言うよね, もうね, ほんとにワニがね, こういう, このぐらいの高さのね, 囲いの中に手かけたまま, {形の真似} こういうふうに止まったんですよ.
- 3M: はは, そうらしいですよ

ここで思い出すのは, タネンの提示した男女の会話のスタイルの違いである。タネンは, 人と人との繋がりを大切にする女性の社会では, 会話とは仲間との親しい関係を作るための手段であるのに対して, 男性社会での会話は, 自分の独立を保ちながら, 社会階層の中に自分の地位を確立するための手段であるため, 自分の意見を主張したり, 冗談を言ったり, 情報を提供したりして注目的になるようにする傾向がある, と述べた。3節では, タネンの提示した男女差はある程度は日本にも当て嵌まるが, 異なっている部分もある, それはタテ社会としての日本社会の特徴から来るものである, と述べた。このことは, 上の会話でも確かめることができる。日本の女性の場合, 人と人との繋がりを大切にするという点はタネンの提示した女性の会話と同じであるが, (1)に示されるように, 丁寧体を回避したり俗語や内輪の言葉を使うのは目上の方がスタイルを交替させた後に行なうものであり, その場における自分の相対的位置はわきまえて行なわなくてはならないという点は, 日本社会の特徴から来るものであろう。一方, 男性の場合は, 女性よりも社会階層を意識するという点はタネンの説

が当て嵌まるが, 特定の場での上下関係は予め決まることが多く, (2)のように若くても大人気の歌手の場合(別だが)あまりに自己主張をしすぎると響きを買うことも多いため, 予め決まった上下関係に従うだけの言葉になってしまう, (3)のように, あまり面白みのない発話になりがちである。

終助詞については, 大体どの会話においても頻繁に用いられているが, 会話10の司会者の発話には極端に少ない数の終助詞しか用いられていない。これは, ゲストの身分が非常に高いため, 司会者が終助詞を使いすぎると「馴々すぎる」という印象を与えかねないためだと考えられる。また, 冗談や面白可笑しい話については, 殆ど男性が用いていることが分かる。上記(2)(3)の例の時にも述べたが, これは自分の話に注意を向けるための手段の1つであると考えられる。

## 5. 終わりに

この論文においては, それぞれ5人の男女と女性インタビュアーとの会話を録音し書き取ったデータを基にして, 日本語の会話に見られる男女差を分析した。その結果, 自称詞については, 女性の場合公的な場面でも私的な場面でも「わたし」または「あたし」にほとんど統一されているため使用しやすいが, 男性の場合「ぼく」や「おれ」はあまりに口語的すぎると感じられる一方, 「わたし」は女性が使う場合と比べて形式的に感じられるため, これにも統一されず, 自称詞の使用は女性と比べて低いことが分かった。

次に尊敬語, 謙譲語, 丁寧体の頻度については, 女性の方が丁寧な形式を用いているという結果はでなかった。井出他(1985)で報告されたように, 敬語の使い分けには男女差よりむしろ, 其々の場面における各人の立場や機能の方が大きな役割を果たしているようである。

最後に, スタイルの交替については, タネンの提示した女性は人との繋がりに焦点を置くが, 男性は社会的地位に焦点を置くという男女差は概ね当て嵌まるが, 日本社会独特のタテ社会という特徴のために, 男女共に其々の場における自分の立場をわきまえながら, 親交を作ることを目指したり, 地位向上を図ったりしている様子が見えがえた。

## 参考文献

- 阿部圭子. 1997. 「フェミニスト人類学から見た異文化における女性語」『女性語の世界』, 231-239. 明治書院.
- 井出祥子他. 1985. 『女性の敬語の言語形式と機能』文部省科学研究費研究成果報告書.
- 井出祥子他. 1986. 『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂.
- Ide, Sachiko. 1989. Formal forms and discernment: two neglected

- aspects of universals of politeness. *Multilingua* 8-2/3, 223-248.
- 井出祥子. 1997. 「女性語の世界—女性語研究の新展開を求めて—」『女性語の世界』, 1-14. 明治書院.
- 寿岳章子. 1979. 『日本語と女』岩波新書.
- 小林美恵子. 1997. 「自称・対称は中性化するか?」『女性のことば・職場編』113-137. ひつじ書房.
- Lakoff, Robin. 1975. Language and Women's Place. *Language in Society* 2, 45-80.
- レイコフ, ロビン. 1990. 『言語と性—英語における女の地位』かっえ・あきば・れいのるず訳. 有信堂.
- Matsumoto, Yoshiko. 1988. Reexamination of the Universality of Face: Politeness Phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
- 松村瑞子&因京子. 1998. 「日本語におけるスタイル交替の実態とその効果」『言語科学』33, 109-118.
- \_\_\_\_\_. 2000. 「日本語の会話における丁寧さ」『韓日語学文化研究創刊号』国際語学研究所.
- 中根千枝. 1967. 『タテ社会の人間関係』講談社.
- \_\_\_\_\_. 1978. 『タテ社会の力学』講談社.
- 中島悦子. 1997. 「疑問表現の様相」『女性のことば・職場編』59-82. ひつじ書房.
- 尾崎義光. 1997. 「女性専用の文末形式の今」『女性のことば・職場編』33-58. ひつじ書房.